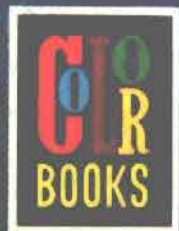


平家物語

— 古典カメラ紀行 —

門脇禎二・横井清 共著



平家物語

カラーブックス 105

二 禎 協 門 共 著
清 井 横



HOIKUSHA

門脇 禎二 (かどわきていじ)

1925年 高知県に生る

京都大学史学科卒業

専攻 日本古代史

現在 奈良女子大学教授

《著書》「日本古代共同体の研究」(東大出版会)

「神武天皇」(三一新書)

「采女」(中公新書) その他

《現住所》京都市右京区鳴滝松本町29



横井 清 (よこいきよし)

1935年 京都市に生る

立命館大学大学院文学研究科(修士課程)修了

専攻 日本中世史

現在 京都市史編さん所嘱託

《著書》「京——歴史と文化」(共著, 光村

推古書院)

《現住所》京都市下京区上枳殻馬場通河原町西入



カラーボックス 105) 平家物語

定価 250円

昭和41年6月25日印刷 昭和41年7月1日発行

著者 門脇禎二・横井 清 発行者 今井龍雄 発行所 株式会社 保 育 社

大阪市東区内久宝寺町1の20 電話 大阪 (762)1731~6 振替口座 大阪12346

東京出張所/東京都台東区台東4丁目7 電話 東京 (833) 4071~3番

印刷/アール印刷株式会社/大谷印刷株式会社/用紙/日本加工製紙株式会社

© 門脇 禎二 1966

万一落丁・乱丁のときはお取り替えいたします。

はじめに

古典としてたたえられる作品はひとしくそうであるように、平家物語もまた読みかえすたびに新しい何ものかを語りかけてくれる。いま現代に生きる国民の一人として、この作品に接してみると、平家物語はまた一つ新しい顔をみせてくれたように思われてならない。

よくいわれるように平家物語は、概してすべてのものの運命^{さだめ}を、その滅びの美しさ、はかなさにおいて描こうとする。新しく興りくる力の躍動に眼をみはりながらもなお、命つきはててゆくものへの歌にみちみちているのだ。そのことは、琵琶の音曲にのせて語られるという本来の性質とも深くかかわっているのである。だが、その底には変革の時代の歴史が激動し、その渦中をたたかい抜き、生き抜こうとする人間群像がある。底しれぬ飢え、渇き、血みどろの謀略と殺りくの中に狂奔する生々しい人間たちの記録なのだ。平家物語は、それらさえも余りにも美しくうたいあげているために、私たちはともすれば背後を貫ぬく歴史のきびしさから眼をそらしがちになっていなかっただろうか。平家物語の美文の背後にひそむ歴史と人間の真実——それを読者の皆さんとともに捉えなおしてゆきたいと思う。

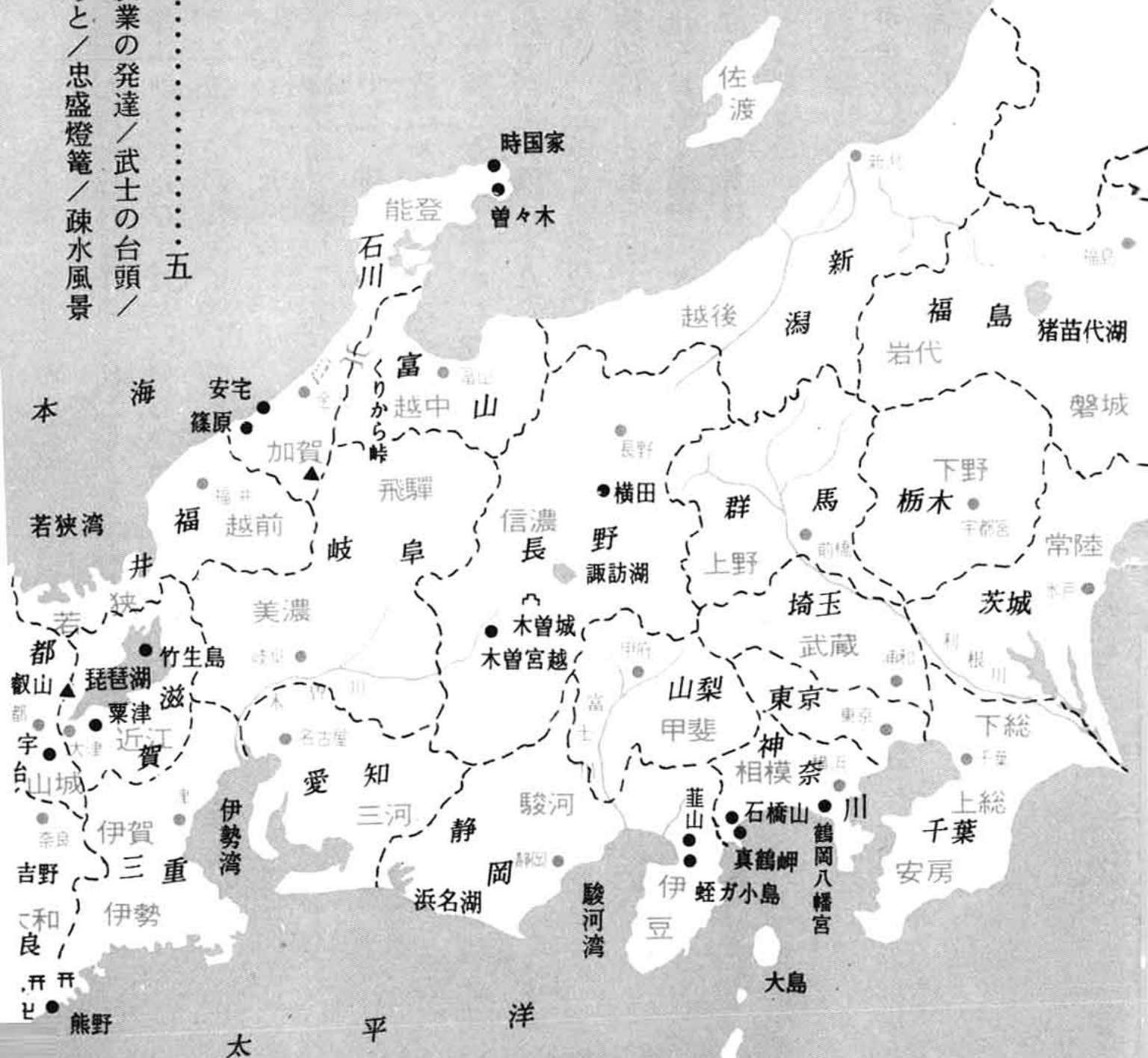
なお、できるだけ原典に親しんでもらえるように引用文を随所に添えた。このささやかな書物を一つの手がかりにして、一人でも多くの方々がなまの平家物語にふれなおしてくだされば、著者としての喜びこれにすぐるものはない。

目次

I 平氏の台頭……………五

武士のふるさと／農業の発達／武士の台頭／
平忠盛／白河院のあと／忠盛燈籠／疎水風景

／法勝寺九重塔



II 清盛・重盛……………一三

清盛像／平治の乱／六波羅蜜寺／建仁寺／嚴
島神社／小松谷正林寺／太刀小烏丸／平重盛
／清盛の子女／小督こさうの局／俊寛僧都／鹿ガ谷
／嵯峨野／祇王寺／三尾／神護寺／徳子の出
産／比叡山／興福寺／法住寺／三十三間堂／
源頼政の拳兵／三井寺／宇治橋／平等院

Ⅲ 頼朝・義経・義仲……………四一

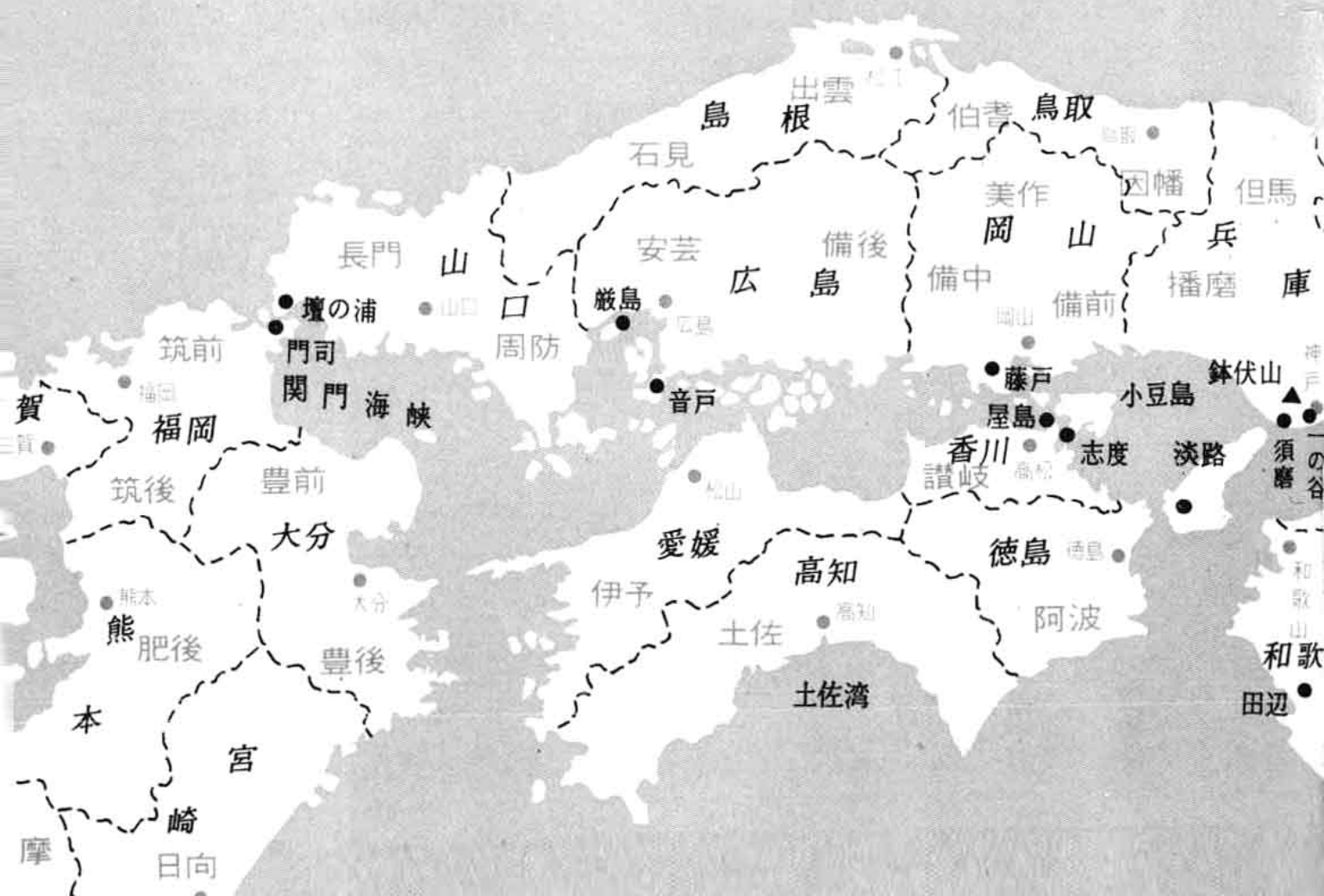
鞍馬の山／常盤御前／福原遷都／源頼朝拳兵
／石橋山の戦い／源氏結集／鎌倉／飢饉うきん／富
士川／木曾義仲／横田河原合戦／竹生島／く
りから峠／義仲の最期／義仲寺／今井兼平

IV 一の谷・屋島・壇の浦……………六五

鶴越ひさごえ／敦盛の最期／横笛と滝口入道／新熊野いまだまの
 神社／屋島攻め／屋島／壇の浦の合戦／安徳
 天皇入水

V 平家物語の残照……………八三

平時忠／時国家／吉野山／義経の都落ち／地
 獄／往生極樂院と寂光院／大原西陵／琵琶／
 菖蒲谷池



祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響あり。沙
羅雙樹の花の色、盛者必衰のことはりをあら
はす。おごれる人も久しからず、只春の夜の
夢のごとし。たけき者も遂にはほろびぬ、偏
に風の前の塵に同じ。(巻第一、祇園精舎)





青葉の木立に囲まれた寂光院の門

さる程に、寂光院の鐘の声、今日も暮れぬと打ち知られ、夕道西に傾けば、御名残惜しうは思しけれども、御涙を押さへて還御ならせ給ひけり。女院は今更古を思し召し出でさせ給ひて、忍びあへぬ御涙に袖のしがらみせきあへさせ給はず。遙かに御覧じ送らせ給ひければ、御本尊に向かひ奉り、女院「先帝聖霊、一門亡魂、成等正覚、頓證菩提」と泣く泣く祈らせ給ひけり。

来し方行く末の事共思し召し続けて、御涙にむせばせ給ふ。折しも山郭公の音信れければ、女院「いざさらば涙くらべんほととぎすわれもうき世にねをのみぞなく」(灌頂巻、六道)



遠く異朝をとぶらへば、秦の趙高、漢の王莽、梁の朱葬、唐の禄山、是等は皆旧主先皇の政にもしたがはず、樂みをきはめ、諫をもおもひいれず、天下のみだれむ事をさとらずして、民間の愁る所をしらざつしかば、久しからずして、亡じにし者どもなり、近く本朝をうかゞふに、承平の将門、天慶の純友、康和の義親、平治の信頼、おごれる心もたけき事も、皆とりどりにこそありしかども、まちかくは、六波羅の入道前太政大臣平朝臣清盛公と申し人のありさま、伝承るこそ心も詞も及ばれね。

其先祖を尋ねれば、桓武天皇第五の皇子、一品式部卿葛原親王九代の後胤、讃岐守正盛が孫、刑部卿忠盛朝臣の嫡男なり。彼親王の御子高見の王、無官無位にしてうせ給ぬ。其子高望の王の時、始て平の姓を給て、上総介になり給しより、忽に土氏を出て人臣につらなる。其子鎮守府將軍良望、後には国香とあらたむ。国香より正盛にいたるまで、六代は諸国の受領たりしかども、殿上の仙籍をばいまだゆるされず。(巻第一、祇園精舎)

しかるを忠盛備前守たりし時、鳥羽院の御願得長寿院を造進して、三十三間の御堂をたて、一千一鉢の御仏をすへ奉る。供養は大承元年三月十三日なり。勸賞には關国を給ふべき由仰下されける。境節但馬国のあきたりけるを給にけり。上皇御感のあまりに内の昇殿をゆるさる。

忠盛三十六にて始て昇殿す。雲の上人は是を猜み、同き年の十二月廿三日、五節豊明の節会の夜、忠盛を闇討にせむとぞ擬せられける。(巻第一、殿上闇討)



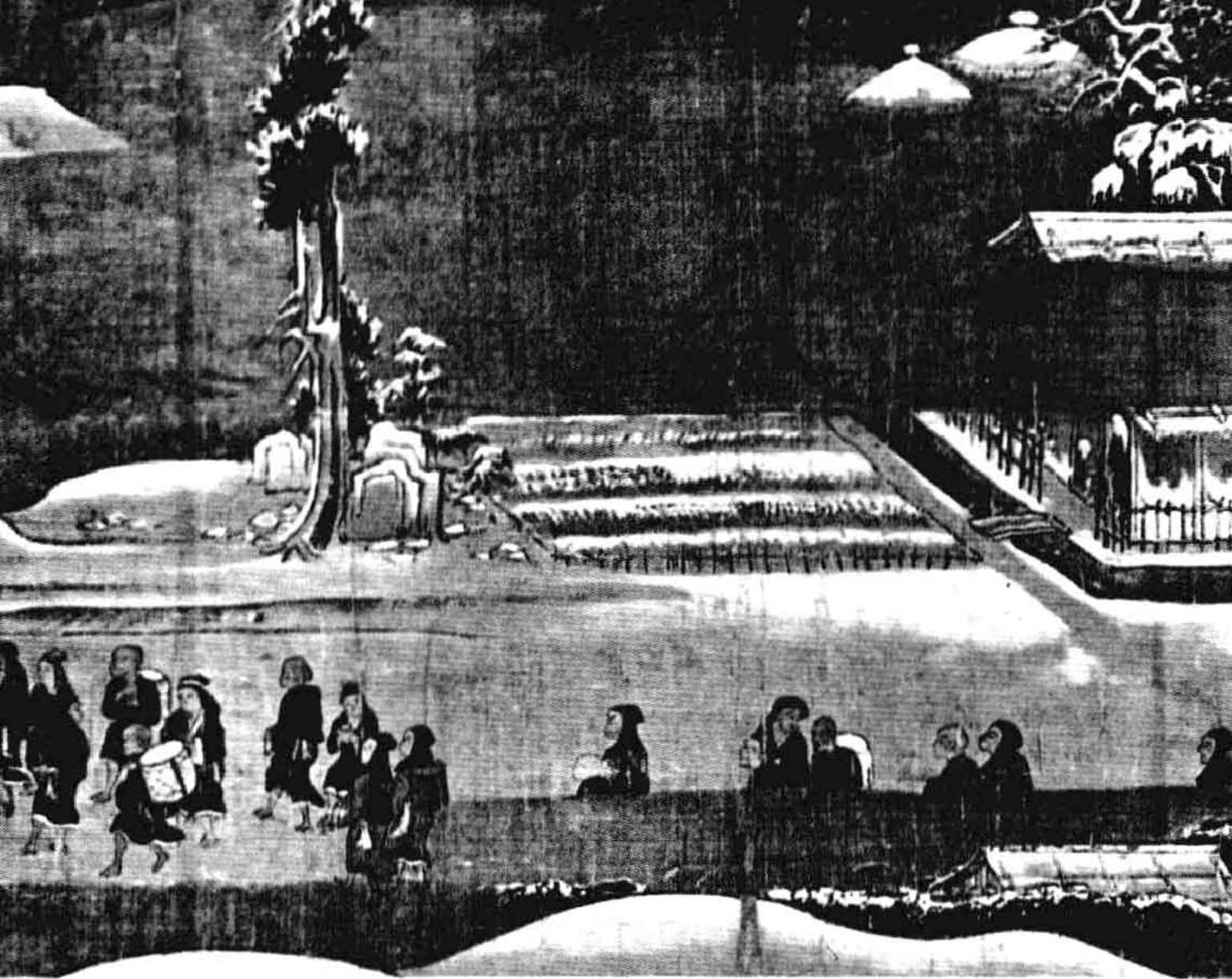
源氏の発生地、摂津多田の田園風景

I 平氏の台頭

武士のふるさと

武士のふるさと――

それは草ぶかい農村であつた。莊園であれ公領であれ、農業生産を基礎に力をたくわえていた武士たちによって、中世社会が切りひらかれてゆく。



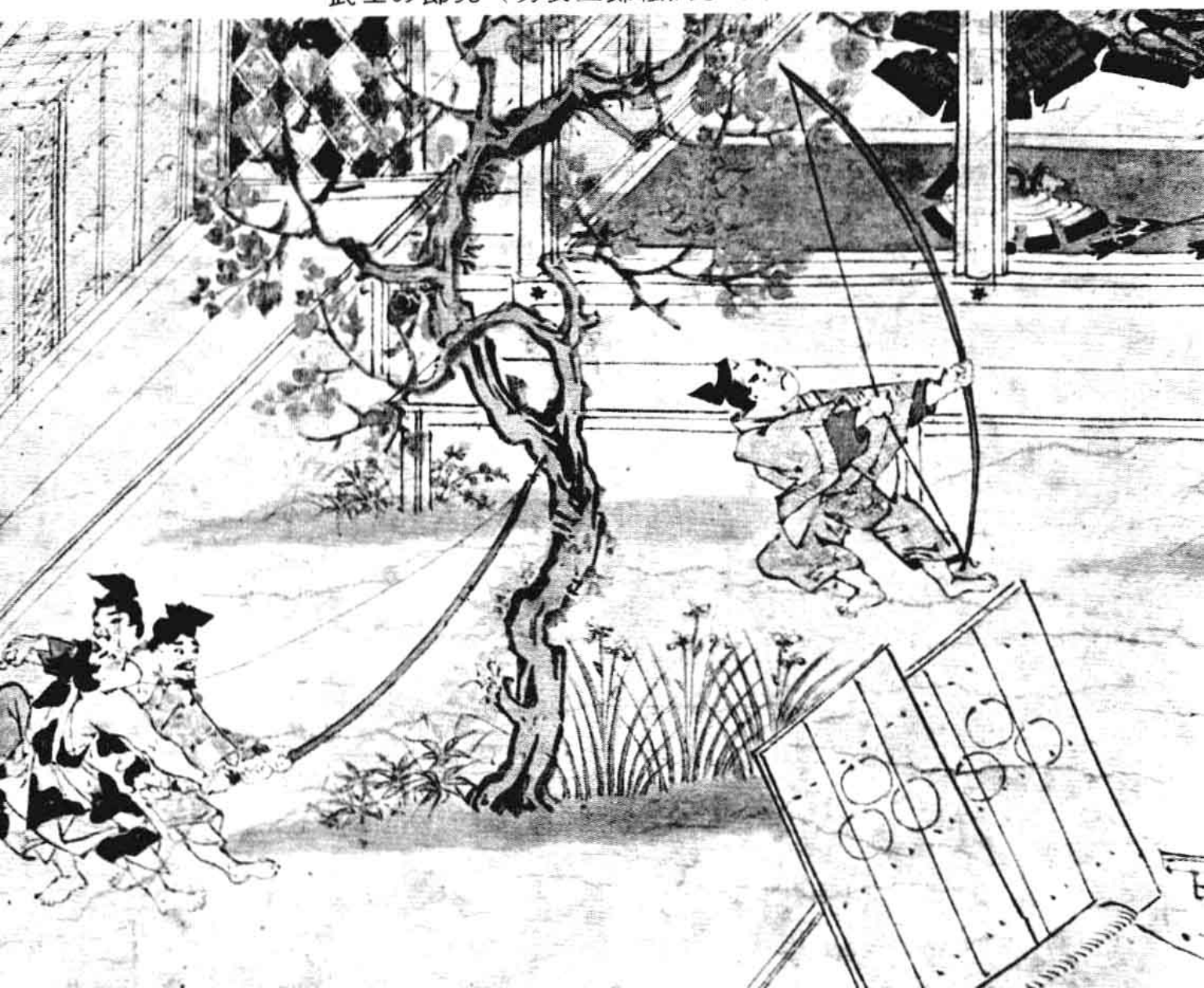
中世の農村風景（一遍上人絵伝より）

農業の発達 十一世紀から十二世紀へかけて、農業の発達にはめざましいものがあつた。まだまだ粗放な技術ではあつたが、種もみの浸種や、犁耕の普及などがみられ、また田植えのときなどに互いに労働を提供しあう「ゆい」という労働組織もひろまっていた。浸種というのは、種子の発芽を速め、いっせいにさせるために「たな井」「たな池」にひたして、必要な水分をあらかじめ種子に吸収させておく方法である。犁耕はスキによる耕作、しかも牛や馬の力を利用するものである。「ゆい」が、田植えどきに、田楽のにぎやかなおはやしとともに展開される光景は、有名な「新猿楽記」や「栄華物語」にも印象的に描かれている。稲の根刈りや稲こきが普及するのも、この時代のことであつた。

武士の台頭 平安末期、摂津の国、多田莊という莊園に源満仲という武士がいた。かれのもとには「郎党」^{ろうどう}がおり、その下には何百人もの「従者」が組織されていて、この地域一帯の実力者だったという。この従者たちは、農民たちであり、ふだんは農耕に従事するが、いったん緩急あれば直ちに満仲の邸館にはせ参じ、戦に加わるのであった。

こうした武力組織は、十一世紀ごろから各地で育成され、強い主従関係で結ばれていた。ことに東国の武士たちを結集して勢威を築いた源義家は、摂関家と結びついて、源氏一門の繁栄をもたらした。

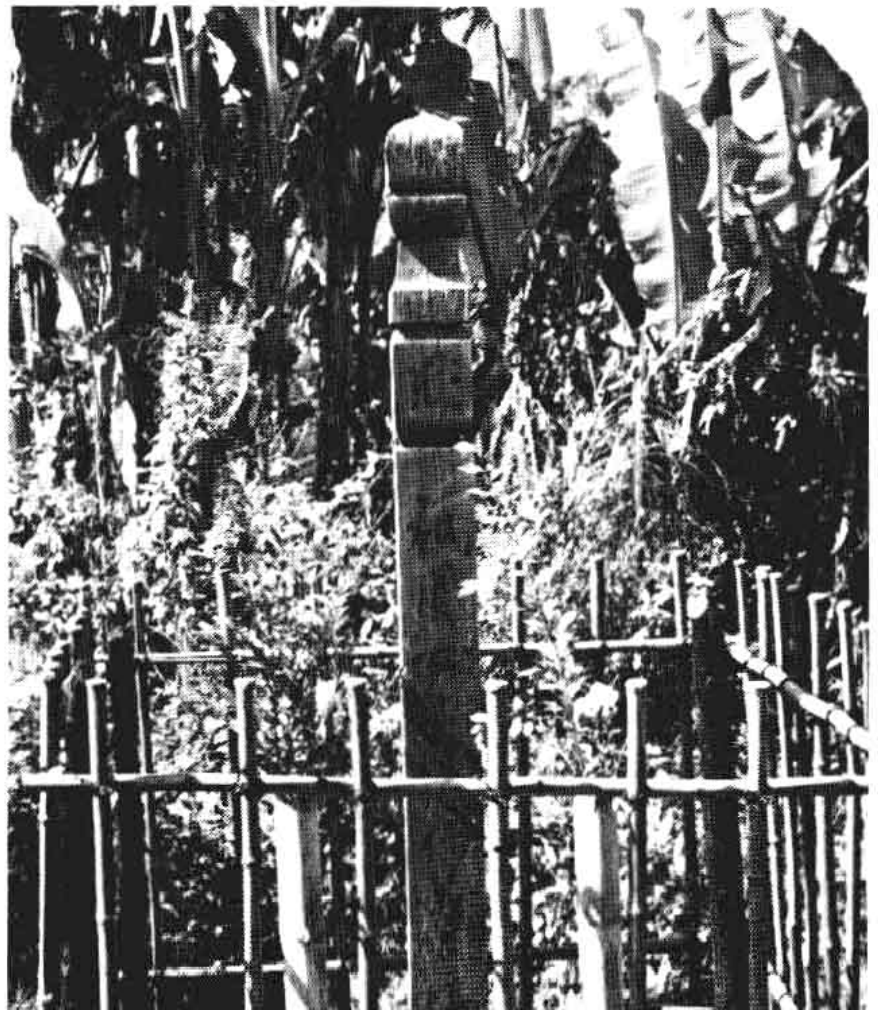
武士の郎党（男衾三郎絵詞より）



忠盛、御前のめしに舞はれけるを、人々拍子をかへて、「伊勢平氏はすがめなりけり」とぞはやされける。…伊勢国に住国ふかりしかば、その国の器にことよせて、伊勢平氏とぞはやされける。その上忠盛の目の眇めたりけるによつてこそ、かやうにはやされけるなれ。（巻第一、殿上闇討）

平忠盛 源氏は摂関家と運命をともしして、新しい政権「院庁」の勢いにおされて衰えた。それにかわつて平氏―伊勢平氏が都に進出して、正盛・忠盛父子の時代になると院庁のなかでも重い位置をしめるようになった。ことに忠盛（清盛の父）は、白河院・鳥羽院につかえて活躍、ついに武士としては初めて昇殿（清涼殿の南面、殿上の間に昇ること）を許された。かれこそ、平氏一門の繁栄をきりひらいた人物であるといえよう。

忠盛は若年のころより白河法皇のそば近くに



円山公園の片すみにある祇園女御塚

仕え、法皇の寵姫祇園女御を賜わつて妻となしたという。これは平家物語の筆者の誤りで、実は、女御の妹のことだともいわれる。それとはかく、素姓のはつきりしないこの祇園女御の権勢はいちじるしいものがあつた。



白河院のあと

白河院のあと 白河法皇が離宮として使っていた白河院の跡は、洛東岡崎の地にあつて、ひっそりと立つ一基の石碑にその名をのこすのみ。この一帯は、美術館・図書館・京都会館・動物園・グラウンド、そして平安神宮をかかえこんだ文化観光の一大センター。

石碑の前を東へ歩めば、清らかな白川のながれが、私たちをむかえてくれる。



忠盛燈籠

忠盛燈籠 白河法皇が祇園女御のもとへ「おしのび」で出かけたとき、石燈籠のかげに鬼をみつけた。忠盛がとらえてみると灯油を注ぐ老法師だったという話。平家物語の作者が、忠盛の沈着さをたたえて語る一節である。八坂神社の境内に立つこの古い燈籠がそのときのものだといえられるが根拠はない。



若王子山から岡崎をのぞむ

忠盛、備前国より都へのぼりたりけるに、鳥羽院「明石浦はいかに」と尋ねありければ、「あり明の月も明石の浦風に浪ばかりこそよるとみえしか」と申したりければ、御感ありけり。（巻第一、鱸）

疏水風景 岡崎一帯は、白河院だけでなく、東山の裾に壮大な堂塔伽藍の建ちならぶ一大宗教センターであった。院じしんが法勝寺という大寺の中にある、それは尊勝・景勝・円勝・延勝・成勝の諸寺とともに「六勝寺」と総称されて、朝な夕な鐘の音と読経の声が絶えなかった。

その南辺をゆつくりと流れる疏水。その水はあくまでも碧く、かれることをしらない。明治の産物なのだが、四季それぞれに柔らかな彩りをそえる。

法勝寺九重塔 白河院政

の拠点、法勝寺の地は、もと関白頼通が伝領した藤原氏代々の別荘地。白河天皇勅願の寺として一〇七七年（承暦元年）金堂等が完成。その数年のちには、境内に巨大な塔が建てられて、八角九重という奇抜なデザインで目をひいていた。院をとりまく近臣たちが私財を投じ、きそって寺院堂塔を建立、寄進するのは院政時代の特徵で、法勝寺もそのような風潮の産物であった。塔のあとは、今は動物園のなか、こどもたちのざわめきに囲まれている。

今は動物園のなか、法勝寺九重塔跡

